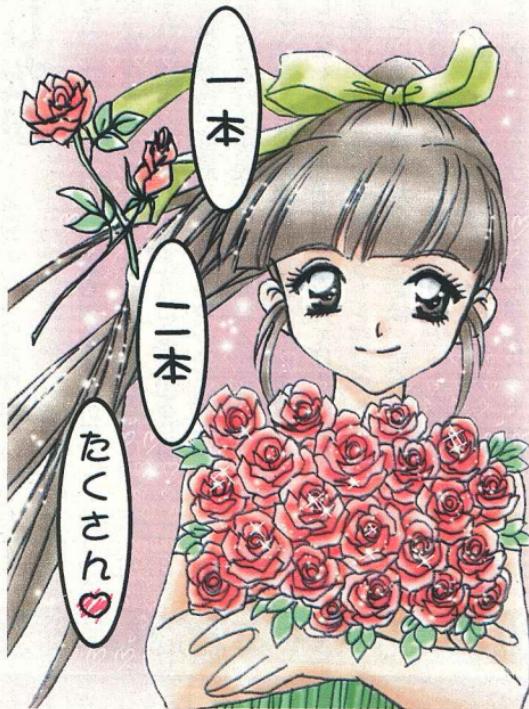


# 意外と原始な私たち

活字離れということが世間で言われている。みんなマンガやアニメばかり見て、本を読まないという。マンガやアニメは「感覚的」だが、活字の本は「論理的」と考えられているのだろう。たしかに、本には文字がいっぱいあって、文字はいろんな言葉になつていて、言葉は絵や映像と違つて「論理的」で「抽象的」だと考えられやすい。

ニュータイプの読者の中にも言葉の本も好きだという人がいるだろうし、別にアニメファンにコビを売ろうというわけではないが、今回は言葉には実はとても「感覚的」で、「原始的」なところがあるという話をしてみたい。数の話をしよう。数というのは実はとても「抽象的」なものだ。「一兆」なんて数字はとてもつもない数字で、実感としては全然わかれないが、言葉の上では「一兆の一兆倍」などといふさらに想像もつかないような数字をたやすく言えたりする。こんな現実離れしたものはない。

しかし僕たち人間がずっと暮らしてきて、



Illustrated by MIYATA NAOMI

では、という話だが、実はたぶん1、2、3くらいだろうと思われるのだ。

ある南アフリカのブッシュマンの言語では数を表すことばが2つしかない。「ア」と「オア」だけだ。「ア」が「1」で、「オア」は「2」である。じゃ、「3」はどういうかというと、それを組み合わせて「オア・ア」とい、「4」なら「オア・オア」、「5」なら「オア・オア・ア」なのである。つまり言葉上は「1」と「2」しかなくて、「3」以上は

要するに「たくさん」で、ふつうには数えられない（あくまでも言葉上は、だけど）。

そんな原始的な言語なんて、とバカにするかもしれないが、日本

語だって英語だってやつぱり「1」と「2」だけが特別なのに気づいているだろうか？まず、「1つ、2つ、3つ、4つ…」と10まで数えてごらん。それから今度は「1、2、3、…」と10まで数えてみて。違う数字の読み方があるのが、わかるでしょ？「ひとつ」、「ふたつ」の場合は日本の昔からの読み方だ。「イチ」、「二」、「サン」の方はだいたい中国から入った読み方を日本風にしたものだね。じゃなら「オア・オア」、「5」なら「オア・オア・ア」などである。「イチニン」、「ニニン」と数えた人は日本人じゃないかもね（でも「二人三脚」とはいう）。

英語については、紙面がなくなつたから、英語を勉強したことのある人は自分で考えてみよう。『one』、『two』、『three』…と順序を表す『first』、『second』、『third』…と並べて書いてごらん。これに気づいた君は言語学のセンスがあるかもよ。